

## B-68 リニアック治療後の末梢血リンパ球の変動—

肺癌患者と他の癌患者との比較検討

大阪大学 医学部 第三内科

○渡辺 武, 朝山修造, 西川秀樹, 山村雄一

我々は、先に、リニアック治療後の肺癌患者に見られる末梢血リンパ球の減少が、主として、T-リンパ球の量的減少に起因し、又、同時に機能的低下も認められ、しかもこの量的、機能的低下がかなり長期に亘ることから、リニアック治療の細胞性免疫に及ぼす影響について推察を加えたが(第2回日本臨床免疫学会)、こういった現象が、リニアック治療後の肺癌患者にだけ特異的に見られるものかどうか、即ち、胸部以外の部位に放射線照射した場合にも同様な現象が見られるものかどうかを検討するため、子宮癌患者及び上咽頭癌患者でリニアック治療を受けた患者を対象に、その末梢血リンパ球の総数、T-リンパ球、B-リンパ球の割合、及び、絶対数、さらにPHAに対する反応性について調べ、肺癌患者の場合と比較検討し、上に述べたリニアック治療後の肺癌患者に見られるT-リンパ球の量的、機能的低下の原因に関して若干の考察を試みたのでここに報告する。

## C-1

原発性肺癌の核DNA量に関する研究

長崎大学医学部第Ⅱ内科

中塚重和、雨森博政、籠手田恒敏、

高木正隆、吉村康、中野正心、原耕平

### I、研究の目的

癌の発生は正常組織細胞がある時期に何らかの原因で悪性化して、無規律に、無制限に、分裂増殖していくものとされている。DNA合成は細胞分裂に関しておこるものであるから、癌細胞における細胞核DNA量は正常細胞より増加していると考えられる。子宮癌、肺癌、胃癌についてはすでに多数の報告がある。我々は原発性肺癌についての核DNA量を測定し、肺癌の組織型との対比を行った。

### Ⅱ、研究方法

当教室に入院した原発性肺癌患者の手術、剖検によって得られた肺組織中の肺癌細胞を対象とした。DNA測定法は肺癌組織を50%ホルマリン液で正確に、24時間固定し、直ちにパラフィン包埋を行って切片を作製し、ホイルゲン染色を施してオリンパス製顕微分光光度計で、直良法によるDNA量測定を行った。肺癌細胞核が切断されることなくしかも核相互の重なりが少ない切片を作製するために、切片の厚さは扁平上皮癌、未分化大細胞癌は20μ、腺癌は15μ、未分化小細胞癌は10μとした。同時にDNA測定と同部位の切片のHE染色を行いSAT、CAT分類を行いDNA値と比較した。

### Ⅲ、結果

各組織型のヒストグラムは多峰性で変異の巾が広く、多倍数体細胞が多くみられた。核DNA量とSAT、CAT分類の対比でも興味ある結果が得られた。